

平和への願いをこめて
10 女教師編
創価学会婦人平和委員会編



戦禍の教室で



国の教えるところと
自己の信念のはざまに悩みながら
教え子の生命を護ろうとした
女教師たちの記録——

△シリーズ△平和への願いをこめて⑩
女教師編
戦禍の教室で

昭和五十八年十二月八日 初版第一刷発行

編者 創価学会婦人平和委員会

発行人 栗生一郎

発行所 第三文明社

東京都千代田区猿樂町二一五―四

電話(一九四)八七三一(代)

振替・東京五一―二七八三三

印刷所 図書印刷株式会社

ISBN 4-476-07510-X

* 乱丁落丁本はお取り替えます

Printed in Japan

平和への願いをこめて
⑩ 女教師編

創価学会婦人平和委員会編



戦禍の教室で



まえがき

「平和への願いをこめて」のシリーズ第十巻は、女教師の戦争体験の証言を集めました。これを発刊した意図は、疎外と不信に直面している学校教育の現実を打開していくために、母親が無関心であってはならないと思うからです。人間形成にあって教育の持つ重要さは改めていうまでもないことですが、次代を担う子供達の教育に、教師はもとより母親とともに手をたずさえて取り組まなければ、この問題の解決は不可能であると私達は考えるからです。

教科書の右傾化が危惧されるようになって久しくなりますが、来春からの中学校公民教科書は今度の改定によって、核兵器の廃絶や、反核運動などの記述が弱められ、国民の義務、愛国心といった内容が全面に押し込まれています。私達はこうした教科書への検定強化と広域採択という事態を目の前にして、このまま手をこまねいては再び「いつか来た道」を歩むような時代を招来しかねないとの強い危機感をいだいています。したがって、かつて戦争に組み込まれてしまった戦時下の実情を再現することこそ、いま私達がしなければならぬことではないかと考え、女教師の戦争証言を編纂しました。

と同時に、私達が恒久平和をどう創出していくかを考えるとき、次代を担う子供達をどう育ん

でいくか、平和と教育の問題はきわめて大事な一点であると考えるからです。

今回、手記を寄せてくださった方達は、皆戦時下の学校教育の場を経験した人達です。その当時の事を思いだしたくないとの思いを越えて、戦争に傾斜していった状況を綴っています。彼女達は学校教育の場で、教科書を通して、意識するとならないとにかかわらず、結果的には軍国主義思想を教え子の中に植えつけていったわけです。いま、彼女達の多くが涙ながらに述懐する、教え子達を戦場に送ったこと、戦場で命を落していった子等への慙愧の念は、いまなお心に刻印されています。女教師——、母だったからこそ、女性だったからこそ知る生命の尊さ、それをむざむざふみにじった軍国主義教育、けれど、振り返ってみれば自身も加害者だったのでなかったか——誰の証言を取りあげても、この痛恨の涙のにじまないものはありません。思うに、この女教師達の痛恨の涙は、決して彼女達だけのものではないはずです。それを思うにつけ、この過ちを二度と繰り返さないために、政治の動向を鋭く監視していかなくてはならないと思うものです。考えてみれば、教育とは本来、国家や、イデオロギーを優先させるためのものであってはなりません。“一人ひとりの子供のため”“人間を作る”そのためにあるのが教育の本義でありましょう。したがって、教育の場が国家やイデオロギーの道具にされた愚行を再び繰り返さないために、人間尊厳を第一義とした教育がなされることに私達はあらゆる努力を惜しんではならないと思うものです。

そして、平和な世界、平和な社会を築いていくには、教育の場でこそ戦争体験が正しく継承され、その事を通して「決して戦争を繰り返してはならない」「世界の国々と仲良く手を結んで平和な世界を築いていこう」との信念に燃えて行動していける人間が、陸続と輩出されて行くべきではないでしょうか。

もとより、子供達を育ててゆくのは家庭の役割りでもあります。その自覚と責任を母親自身が自ら厳しく問うた上で、なお、教育の場に大きな期待を寄せるものです。

本書では、都立大名誉教授・創価大学教授であられる三井為友先生、前参議院議員の柏原ヤス先生に大変お忙しい時間をさいていただきました。また創価大学の坂本安富先生には、教科書問題をとり上げ解説していただきました。

なお、創価学会婦人平和委員会は、昭和五十五年十二月に発足して以来、丸三年を迎えるに至りました。この間、戦争体験シリーズ「平和への願いをこめて」の戦争体験証言集十巻の出版と共に、十二回に及ぶ「婦人と平和を考える」講演会を、そしてこの八月には「平和主張大会」を開催し、大きな反響をもたらしてきました。

戦後三十八年、戦争を知らない世代が国民の大半をしめるようになり、戦争の悲惨さ、おろかさを語れる人は、ますます少なくなってきました。とはいえ、現在、世界には局地的には戦火は止まず、大国のエゴによる戦争触発の危機はいぜんとして横たわっています。

平和は他から与えられるものではありません。私達の手で創出していく、戦い取っていくものであることを信じて、こうした活動を地道に続けてまいります。読者の皆様の貴重なご意見、また体験などを委員会あてに数多くお寄せいただければ幸いです。

最後に、出版にあたりまして、執筆、編集に限りない御尽力をいただきました多くの同志の皆様、および第三文明社の方々に、心より御礼申し上げます。

昭和五十八年十二月八日

創価学会婦人平和委員会

委員長 浅野香世子

もくじ

まえがき

歪められた教育思想の中で

人間教育めざし母親学級創設

山崎芳子

12

軍歌で出征兵士を見送った日々

藤野千代子

27

女教師だけの学校

鯉渕フミ

39

戦争を知らないあなたへ

清水清乃

48

欲しがりません勝つまでは

川瀬カナエ

56

授業停止命令の学舎

伊藤ヨネ子

66

歪められた教育の中で

横田とよ

73

勉強を教えられない教師

小林きみよ

80

私を変えた教育思想

大島雅子

87

蕎麦の花に悔恨の思い

清水石とみゑ

97

私も戦争の加害者だったのか	太田栄子	104
山あいの学校にも戦争の"影"	小川紀子	113
勤労学徒動員に参加	小泉綏	122
"生命を粗末にしないで"と送った教え子	中塚妙	128
削減されていた勉強時間	大熊琴	133
山の中にも響いたサイレンの音	伊澤キク	139
子供を抱えて生徒と学校を守る	富山トシ	143
英霊と讃えられた教師、生徒	波多江孝子	148
忘れられないK君の死	山浦千鶴子	153
勤労奉仕の合い間にも歌を	大坪可玖	158
短期間の特訓で助教に	河村富子	162

学童疎開

“太郎は父の故郷へ、花子は母の故郷へ”……………稲葉千枝子 168

蛙や蛇、雑草もたべた……………鎌田純子 179

疎開先でのS君……………若林嶋子 189

日本軍占領下での教育

二十八人の霊よ、安らかに……………中上ミツ 200

“故郷”のぬくもりを奪われて……………奈須綱子 210

《座談会》反戦・平和の意志を語り継ぐために…………… 221

《解説》教科書の歴史と日本人の教育体験……………坂本保富 253

あとがき

装幀／高久省三 表紙・本文イラスト／前田寛

歪められた教育思想の中で

人間教育めざし母親学級創設

山崎芳子(80歳)
東京都板橋区在住



◇教員生活四十余年。東京・港区青山国民学校の教諭として赴任中、そこで取り組んだのは体力作りであった。軍国主義がだんだん厳しくなる中で、いかにしたら真の教育ができるかを模索しつつ終戦を迎える。戦争は平和の敵であるとの実感を深くし、戦後は人間教育の実践、母親学級の創設と意欲的に取り組み、七十歳を過ぎるまで第一線で活躍した。

昭和十六年も押しつまった十二月八日、朝の校庭には千人を超える児童が元気に遊んでいた。と、その時、けたたましく三回断続的にベルが鳴った。おどろいた児童たちは遊びを止め、みんなその場に静かに立ち止まった。朝礼当番の教師が急ぎ号令台に登って、「みなさん、体育館に集まりなさい」と左手を挙げて合図した。

一年生を中央に六年生と高等科が左右両端に整列すると学校長が、

「本朝明け方、日本とアメリカが戦争を始めました。ハワイの真珠湾を、日本軍の決死隊が攻撃したのです。命を捨てて、お国のために戦う兵隊さんの苦勞を思つて、みなさんは、しっかり勉強し強い良い子になりましょう」

と訓示をした。一瞬、広い体育館が満場どよめいた。

やがて、男の先生たちは、紺や茶や縞の背広をカーキ色の国防色に替え、女の先生もまた、和服に袴姿の人はセーターとスカートに、さらに、学校ではモンペに着替えて授業を行なうようになった。

「新聞やラジオで皇軍の強さをたたえているけれど、地図を見たって広さが全然違う。産物も財力も、まったく比べ物にならない大国と戦つて大丈夫か、長く続いたらどうなるだろうか」と、ひそひそ話し合っていたのは高等科の先生方で、「アメリカの国情に通じておられる近衛さんは、戦争に反対だと聞いていたけど、軍部に押し切られたのね」等という遠慮がちな先生たちの声も初めのうちだけだった。

開戦後第一回目の職員会議の席上、学校長から二つの議題が提出された。

「一つには天皇陛下のご真影を学校に置くことは危険だから、所定の場所へお移し申すことになった。近日校長の私が奉持して行つて来ます。

二つには五、六年と高等科は、明治神宮に参拝して戦勝祈願をしたいと思うがどうかね。行きはなるべくかけ足、帰りは徒歩、これを当分続けたいと思う」

これには質問する人もなく、意見を述べる人もなく、ことは決まった。

私は五年生担任であるから、一時間だけ早目に家を出て港区青山の学校に集まり、長い明治神宮参道を経て神宮橋をわたり、そこからは玉砂利を踏んで四列行進し、二の鳥居前に整列して最敬礼をするのである。

それから徒歩で学校に帰り、低学年と一緒に朝礼を行なって、授業に臨む。こうして神宮参りを毎日繰り返したが、不平をいう先生も、遅れて来る児童もなかった。

町では次々と応召。出征兵士を見送る行列の中に、旗を振り振り加わっている小学生の姿を見受けるようになり、入れ代って戦地から帰還される兵隊さんもまた見受けた。帰還兵の中にはなつかしい母校を訪れ、戦争の体験や戦地の模様を話してくれたが、その際異口同音にいうことは、「都会出身の兵は、気もきくし、理解も早いが、体力も持久力も地方出身の兵にははるかに劣ります」

ということだった。

この話は、初めて聞いたわけではない。前の麴町区に奉職中、日支事変に参加した帰還兵も、みな同じことを話していた。区長さんは、その言葉にいたく感じていて、都会の青年たちになぜひ

体力をつけてやろうとし、

「先ず我が区の子供から」とばかりに区に体育の指導員を一名置き、区内七校の体育指導に当たらせた。指導員は七校に順に向いて、体操の指導はもちろん、全校行進、鉄棒、はん登棒登り、縄飛びなどについてみっちり要点を指導し、注意を与えてくれる。

そして年度末に成果発表をするのが年中行事の一つとなった。私も三月八日に、四十二名の二年生を引率して、永田町小学校の新築体育館で、全市の体育関係の先生方に観ていただいた経験がある。

おかげで、区内の教師はみな体操に自信がつき、児童の体位向上に大きなプラスになった。

この青山国民学校も同様に体育には熱心で、柔道、なぎなた、水泳、つな引き、球技などを行ない、午後になるとどの先生も担任の子供を校外に連れ出して歩かせ、走らせ、歌いながら学校に帰る。こうしてひたすら体位向上に取り組んだ。

青山墓地、神宮外苑は子供たちの楽しい身近な散歩道であった。

運動会にも学芸会にも戦時色の濃い勇壮なものを取り扱い、三勇士、トーチカ破り、騎馬戦、軍歌を使ったリズムなどを、どの学年もプログラムに組みこんだ。登校下校には防空頭巾をかぶり、戦争に関係のある歌を口ずさむようになっていった。

戦争を礼讃するような国策によって、子供たちは日本の兵隊さんは強いんだ、戦えばきつと勝